

会長挨拶

感性を揺さぶる飼育体験—動物の力を教育に—

全国学校飼育動物研究会長 宮下英雄

全国学校飼育動物研究会第5回京都大会の開催にあたり、日本小動物獣医師会年次学会市民講座と共催して開催できましたことに、感謝を申し上げます。

また、この研究会の開催にあたりまして、文部科学省、京都府教育委員会、京都市教育委員会の関係各位をはじめ、京都府、京都市の生活科、理科研究会の皆様、そして、校長会、園長会の皆様方のご理解とご協力、ご支援をいただき成功裏に終了できましたことに御礼申し上げます。

さて、この研究会は、発足以来、教育関係者と獣医師会とが相互に協力をしながら、学校飼育動物を介在とし、子どもたちの健やかでたくましく、かつ、心豊かに成長されますことを願って実践研究発表等を重ねて来ております。

その実践の内容は、動物介在による教育実践、動物介在による教育経営、各テーマに対する識者からの基調講演、各自治体と獣医師会、学校、園との協力実践等、大きく分けて四つの側面から発表と報告、総合討論、パネル展示等を重ねて参りました。その発表、討論の中で、共通して語られてきた事項は、キーワードで検索すれば、それは、「動物と触れ合うことによって、子どもが変わる」と言うことです。

子どもの何が変わるか。それは、子どもの「こころ」であり、いのちある生き物へのやさしさ、思いやり、愛おしさへの高まりと、深まりと言えます。また、いのちあるものへの自己責任への自覚の育ちということが出来ます。また、これらの変容は、動物飼育を通して、人間の「脳」の発達と大きなかわりのあることにも注目され、研究が進められてきています。

「動物の力を教育に」という今回のテーマのごとくに動物介在によって、「子どもが変わる。子どもを変えることができる。」ことを目指して、さらに実りある研究活動を積み重ねていかなければならないと強く感じているところです。

今回、貴重な実践事例やパネル展示を拝聴しながら、「動物のもつ力」の偉大さ、他に及ぼす影響の大きさに感得させられました。動物の行動、動物の表情、動物の温もり等が、子どもたちに与える力をA力、それに対して、子どもたちが動物にかかわる行動をB力とすると、常にAとBが相互にかかわりあいながら、子どもの内面に響き、子どもの変容の営みが、 $A+B$ 、あるいは $A \times B$ として行われていることが伺われます。動物の力によって、私たちの感性が揺さぶられます。しかし、単

に動物を飼育すれば、感性が揺さぶられるものではありません。今回ご発表をいただいた事例は、そのことを明らかにしていただきました。そのいくつかを強調させていただきます。

鳩貝太郎氏は、日本の小学校の約9割が、学校で動物を飼育している。このことは世界でも珍しい。学校飼育動物を適切に飼育し、活用できるような飼育環境の整備と学習に有効的に活用できる指導計画の作成が求められる。さらに、中村佳子氏の「愛づる」を引用され、「動物を飼ってそれを愛するだけでは、生命の尊重や心の態度の育成には不十分である。飼いつけて、自分の愛で観察し、考え、相手から学ぶことにより、その本質が見えてきて愛らしくなり、共に生きていることの実感ができるようになる。」と語られています。

また、「教育課程のつながりと広がり」の中で動物飼育の教育課程を縦軸での連続性・継続性を考えることの重要性和、他教科との内容で考える横軸での関連性を考えることの重要性を田村学氏は力説しています。

京都市の加茂麻由佳氏は、「遊び仲間として、時には癒しを与えてくれる存在として、同じ命ある生き物として園内に動物がいることで子どもたちの心の成長に与える影響は、大きいと感じる。相手が言葉の通じない相手であってもその思いを汲み取ろうとしたり思いを寄せたりできる子どもになっていくのではないか。心を動かし、かかわってきた経験の積み重ねによって命の大切さと重さを感じることができる。」同じく、森田富美子氏は、「生き物とのふれあいは、心に計り知れないほどの大きな影響を与える。」獣医師会との体験教室の重要性和とその継続施策を語られています。

川崎市の高橋信子氏は、小学校教師として「学校で動物を飼育する意義をどう考えているのか疑問に思うことがある。飼育舎の動物飼育が子どもの心を育てる愛情飼育ではなく、学校環境の一つとしての動物飼育になっていないか。」と現状を分析して指摘をされています。

どの事例も、貴重な実践からの提言です。この提言に至るまでには、多くにご努力とご苦労があったと思います。どんなに厳しい冬の時代があったとしても語らず春はやって来ます。「春の来ない冬はない」ことを信じて、研究のネットワークと研究の質を求めていきたいと考えています。

(聖徳大学人文学部児童学科 教授)